

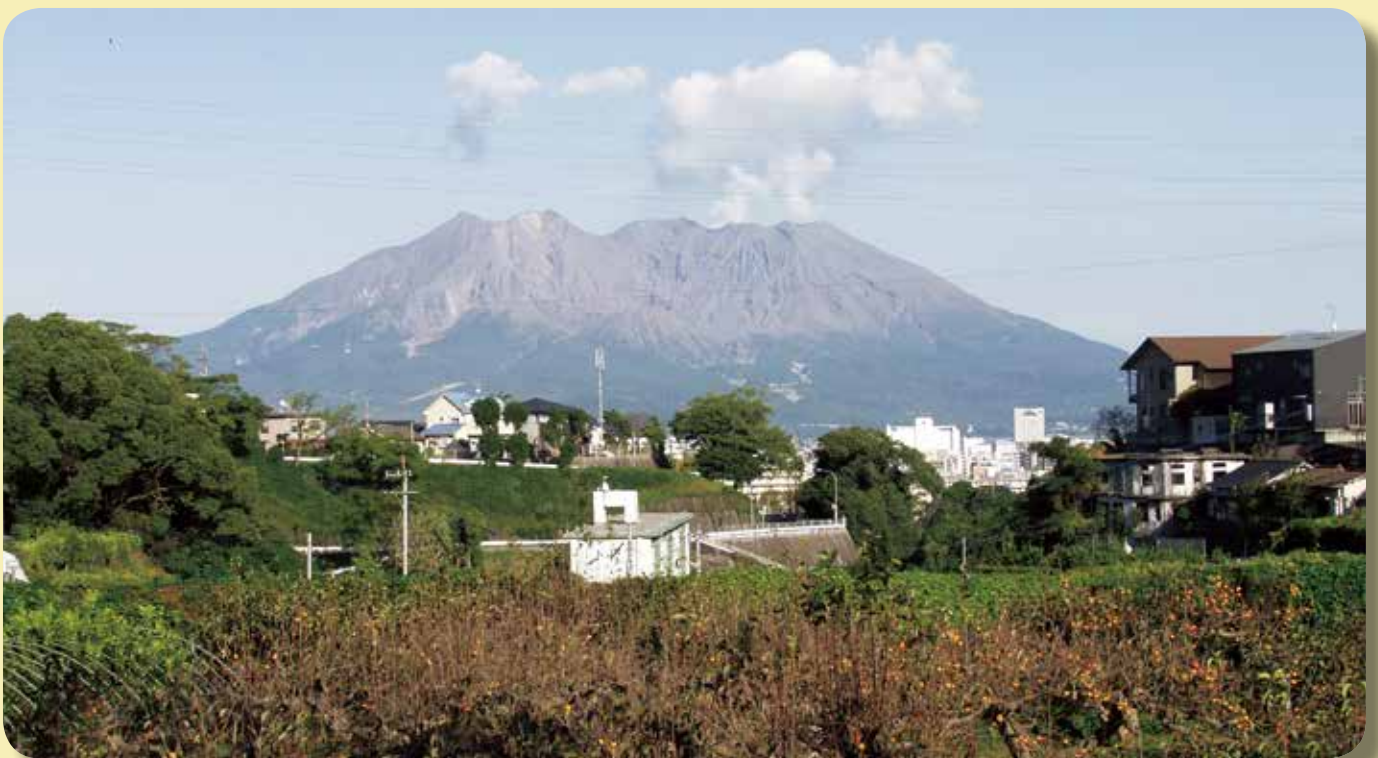
あらた同窓會

平成30年 秋季号

平成30年11月23日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会
学生会員向け会報

電話 099-285-8537



唐湊果樹園から見た桜島





附属農場水田風景



附属農場における稲刈り実習

目 次

1. 巻頭言……「実りある大学生活を過ごしていますか」	藤田 晋輔	2
2. 平成最後の改組「農林水産学研究科」	岩井 久	3
3. 学生向け講演会「海外で経験し、学ぼう」－高等農林学校建学の精神から－	富永 茂人	4
ビバ・キャンパスライフ		
●生物生産学科（農業生産科学科）		
4. 応用植物科学コース		
「3年間の大学生活」	植物栽培・機能学研究室 学部3年・松尾 遥花	5
5. 園芸生産学講座		
「大学生活を振り返って」	果樹園芸学研究室 学部4年・加治屋綾乃	5
6. 病虫害制御学講座		
「大学生活を振り返って」	害虫学研究室 学部4年・清水 祐里	6
7. 畜産科学コース		
「3000円をけちるんじゃなかった、」	家畜管理学研究室 学部3年・小澤 優作	6
8. 農業経営経済学講座		
「素晴らしい4年間をありがとうございました。」	農業経営学研究室 学部4年・彌富 泰宏	7
●生物資源化学科（食料生命科学科）		
9. 生命機能化学講座		
「かけがえのない日々」	応用分子微生物学研究室 学部4年・鮫島 かな	7
10. 食品機能化学講座		
「学生生活を振り返って」	食品分子機能学研究室 学部4年・二原 萌莉	8
11. 食糧生産化学講座		
「一人のすゝめ」	植物栄養・肥科学研究室 修士2年・角 一機	8
12. 焼酎学講座		
「私の大学生活」	焼酎製造学研究室 修士2年・岩崎 史奈	9
●生物環境学科（農林環境科学科）		
13. 森林科学講座		
「わたしのビバ・キャンパスライフ」	森林計画学研究室 修士2年・山田誠太郎	9
14. 環境システム学講座		
「大学生活を振り返って」	農業環境システム学研究室 学部4年・岩切 祥人	10
15. 生産環境工学講座		
「大隅半島南部でのディープな1週間」	農地工学研究室 学部4年・板井雄太郎	10
●国際食料資源学特別コース（農学系サブコース）		
16. 国際食料資源学特別コース（農サブコース）		
「国際食料資源学特別コースでの4年間」	害虫学研究室 学部4年・藤井 雄介	11
教育実習奮闘記		
17. 「教育実習を振り返って」	生物生産学科 害虫学研究室 学部4年・宮崎 美樹	12
18. 「教育実習での収穫」	生物資源化学科 応用分子微生物学研究室 学部4年・檜木まどか	12
19. 「教育実習を終えて」	生物環境学科 利水工学研究室 学部4年・久保 文哉	13
インターンシップ体験記		
20. 「インターンシップを終えて」	農業生産科学科 農業経済学研究室 学部3年・榎田 浩人	13
21. 「インターンシップを終えて」	食料生命科学科 植物栄養・肥科学研究室 学部3年・小田口茉由	14
22. 「インターンシップを終えて」	農林環境科学科 育林学研究室 学部3年・若松 美穂	14
介護体験記		
23. 「介護体験実習を終えて」	生物環境学科 利水工学研究室 学部4年・酒匂 弥生	15
留学報告		
24. 「あの日の言葉がくれた魅力的な“世界”」	生物生産学科 家畜育種学研究室 学部4年・有馬 航輝	15
25. 「留学体験記」	生物環境学科 利水工学研究室 学部4年・日吉 恵理	16
26. 「ミャンマーで国際協力を学んで」	農業生産科学科 学部1年・久富 紫音	17
編集後記		18



実りある大学生活を過ごしていますか

鹿児島大学農学部あらた同窓会
会長
藤田 晋 輔

本格的に秋が深くなってきました。1年生の皆さんは希望に燃えて4月に入学、前期～夏休みが終わり、後期が始まりました。大学生活にも慣れて、学びやサークル活動で青春を謳歌していますか？それとも共通教育の学びを高校の延長だと感じて、いやいや勉強したり、自由な生活やアルバイト生活にどっぷり浸かり、学びがどこかに行っていないませんか？

経験を少し書きましょう。私も約60年前に諸君と同じ道を歩き始めたのですが、目標とした分野に入学し、自省する暇もなく、3、4年、そして専攻科の先輩に教えてもらいながら、専門的な事に新しい切り口を見出すのを楽しみながら過ごした記憶があります。共通教育科目の中には高等学校の復習もありますが、学び方によっては、大学卒業後の人生に大いに役立つ「考え方の礎」が隠れています。就活の学年はすぐにきます。研究生生活に入りたい人もいます。いずれにしても、専門書だけに限定せず、広く、多くの本を読み、自分を高めて欲しいと願っています。

私は、2年次に進む段階で木材物理学の分野に進むことを決めましたので、2年後半から、専門に近い分野の各頁に英独左右対称に同じ内容を記載してある100頁を越える専門書を探しだし、結果的に一挙に英・独語の両方を学ぶことに成功しました。当時の大学院修士課程の入試は、農学研究科（修士課程）共通の英・独語および専門科目試験（共通と専門科目）が課せられ、合格ラインはそれぞれの科目で85点でした。和文の専門書を使わず、英独併記の専門書1冊を完璧に読んでしまうことが大切です。大学低学年時代に一回トライしてみませんか？100頁を読み終えるころには、どのような本でも英独共に辞書なしで読めること間違いなし・・・です。

ところで、今年のノーベル医学生理学賞を本庶佑京都大学特別教授がアメリカのジェームス・アリソン氏と共に受賞されました。本庶先生は「教科書を信用してはいけない」と記者会見で述べておられましたが、この意味は教科書に記載されているすべてを信用するのでなく、「常に疑いの目を持って学べ」という事を意味しており、単純に丸呑みするのでなく、教科書の説明を噛み砕き、どのような意味を含み、どのような展開が後ろに隠れているのか？どこに到達すべきか等・・・を読み取らなければ何の役にも立たないことを意味しているのです。「研究雑誌であるネイチャー（イギリス）やサイエンス（アメリカ）に書かれている記事の9割はウソであり、自分の眼で確信し、自分の頭で考えて、実験も納得いくまで行う事が大切であること」とも述べておられます。企業に就職しようが、大学院に進もうが、若い諸君は残されている3年半の大学生活で「疑いの目を持って学ぶ」ことをモットーとして欲しい。

一方、就職活動を行っている3年生、卒業論文作成で走り回っている4年生はこれまでの学生生活に満足していますか？卒業論文作成は進んでいますか？これまでの自分の生活を反省していますか？2月になって慌てないために、そろそろ「まとめ」を始めましょう。

情報獲得の多くをインターネットに依存していませんか？今では、特に解説物はWeb.で簡単に探せますので、即座に信用したくなります。しかし、Web.を簡単に信用せず、疑いの目で検討することも大切です。まとめの段階では、分析機器が出したデータが本当に正しいか？データは信用できないかも？との疑いを持ちながら、データは何を意味するかを読み取る必要があるのです。参考資料はWeb.からでなく、関連する専門書や文献、場合によっては百科事典を引き出し、読みこんで参考にしてみようことを願うばかりです。

諸君の卒業、修士論文は、これからの皆さんの100年人生における最高の実績であり、鹿児島大学農学部、研究科が廃校になっても保存されます。在籍の証と勲章なのです。

ぜひ、二度と来ない時間、満足ゆく残された学生生活を送ることを願ってやみません。



平成最後の改組「農林水産学研究科」

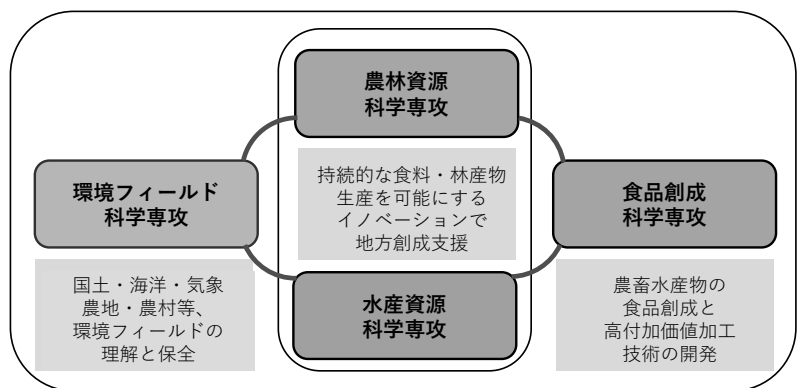
農学部長・農学研究科長
岩 井 久

明治41年に創設された鹿児島高等農林学校は、第二次世界大戦後から今日まで、時代の変化に呼応しながら、数々の組織再編を行ってきました。まず、昭和24年の学制改革に伴い農学、林学、農芸化学、獣医学の4学科および農場・演習林・家畜病院の附属施設を持つ鹿児島大学農学部となりました。その後、畜産学、農業工学、園芸学科の3学科を設置しました。平成2年の学部改組では獣医学科を除く6学科を3学科に再編、平成9年には講座編成改革を実施しました。さらに平成23年には附属焼酎・発酵学教育センターを新設。そして平成24年には獣医学科が山口大学と合体し共同獣医学部として分離独立しました。また、グローバル人材を養成すべく、平成27年には水産学部と連携した国際食料資源学特別コースを設置しました。さらに、近々の平成28年にも学科を改組し、農業生産科学科、食料生命科学科、農林環境科学科として新生し現在に至っております。

その一方で、大学院については、農学研究科（修士課程）が昭和41年に、博士課程の鹿児島大学大学院連合農学研究科が平成2年に創設されました。しかし修士課程のその後については、学部と連動した年次進行での改組は繰り返されたものの、自立的な教育体系の再編は成されてきませんでした。今回この修士課程について、平成31年春を目途に大きな改組を行います。

すなわち、社会からの要請が高い、農学と水産学の両分野にまたがる高度な知識を有する人材を養成するため、既存の農学研究科3専攻と水産学研究科5分野を統合し、4専攻からなる大学院農林水産学研究科を設置することとし、8月に文科省から認可されました。ただし、農学と水産学の両学部は、現行通りの教育組織を堅持し、専門基礎教育を重視することをお伝えしておきます（ちなみに、農学系で3部局を擁する国立大学法人は、鹿児島大学と北海道大学のみであり、これは地域貢献を標榜する本学の大きな「売り」になっています）。目下は、10月31日に実施の入試の準備、それと同時に、新研究科の運営体制の始動に向け、関連する全教職員の協力のもと、規則等の整備を行っております。下に農林水産学研究科の全体像を示しました。

食品創成科学専攻は、食品科学、先端生命科学、焼酎発酵・微生物科学の3コースで構成する農水融合型の専攻で、食品・生命科学関連産業において指導的立場での解決能力を有す人材を養成します。環境フィールド科学専攻も融合型で、生物環境科学と環境システム科学の2コースで構成され、南西諸島や南九州陸海域の環境保全、生産環境・基盤に関する実践的知識と先進技術を身につけた、地域社会で中心となる人材を養成します。農林資源科学は植物生産科学、畜産科学、森林科学、食料農業経済学の4コース、そして水産資源科学は生物資源科学、増養殖学、環境保全学、流通・政策学の4コースで構成され、それぞれの専攻は、伝統分野を継承しつつも、その一方で、農林水産業分野でのIoT（Internet of Things; モノのインターネット＝全ての作業機械や生産現場がネットで繋がり情報収集やオペレーションができるコンセプト）を図る教育・研究をより強力に進め、Society 5.0（仮想空間と現実空間を融合させたシステムにより経済発展と社会的課題の解決を両立する社会）を具現化し、地域や国際社会で農林水産業の発展に貢献できる人材を養成します。平成31年4月開始の農林水産学研究科にご期待ください。



学生向け講演会（平成 30 年 7 月 26 日開催）

「海外で経験し、学ぼう」－高等農林学校建学の精神から－

農学部との共催で行っている平成 30 年度「学生向け講演会」は、一昨年から「海外留学」に関するテーマで実施しているが、今年度は「海外での学び」をテーマにして行った。まず、昨年もお話をいただいたグローバルセンターの畠田谷先生に、「海外での学びを選択肢に入れてみよう」とお話いただき、次いで実際に海外留学した二人の経験者に海外留学を希望した動機、留学先での経験、留学を経験して得られたこと・変化した自分などについて、スライドも使いながら話をしていただいた。出席者は教職員・学生合計で約 50 名であった。以下は、講演会の概要です（二人の留学経験者の経験談は本会報の 15 ページと 16 ページに「留学報告」として書いていただいているので、そちらも合わせてお読みいただきたい）。

1. 畠田谷 桂子先生（グローバルセンター・学生海外派遣部門・部門長・教授／学長補佐）

鹿児島大学の学生の海外留学数は全国でも高い方であり、これまで多くの鹿大生が海外に留学し、学び、大きく成長したという例を上げながら、海外留学には単に海外の異文化を知るだけで無く、海外でしかできない勉強ができるという意義があることを強調された。また、昨年同様「鹿大生が活用できる留学制度」や「留学までに準備すること」などもお話しいただいた。

2. 有馬 航輝君（生物生産学科 4 年）

『越境する力 トビタテ！鹿大生』というタイトルで、文部科学省の「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」派遣留学生に採択されて、オーストラリア・クイーンズランド州の「馬術競技馬調教育成牧場」に 1 年間留学した経験を話していただいた。特に、強調されたのは、この留学がいわゆる大学への留学ではなく「馬術留学」であり、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」では、自ら計画を立て留学先と交渉することで色々なタイプの留学が可能であることであった。また、「馬術留学」としての独特の苦労があったが、自分にとってとても充実した留学であったこと、再度留学したいと話された。さらに、帰国後「トビタテ！留学 JAPAN・学生ブランドマネージャー」になり、同窓会組織「とまりぎ」のコアメンバーとして活動していること、このコミュニティが学生主体のハイパワー集団として、着実に日本中、世界中に手を広げていること、そして、今後続く後輩に「トビタテ JAPAN」を活用して海外に留学することを勧められた（関連記事が 15 ページにあり）。

3. 日吉 恵理さん（生物環境学科 4 年）

「休まぬもの、働くべからず」というタイトルで、学術協定校であるスウェーデンの Linköping 大学へ交換留学をし、言語、文化、教養、国際環境問題を主に学び、挫折もあったが、精神力や知識力が鍛えられた充実した留学であったことが報告された。また、Nordic Culture という授業では、20 か国以上の留学生と

一緒にスウェーデンの文化や歴史の講義やグループワーク、校外学習を行い、国際的問題や政治、お互いの趣味、時にはゴシップまでも共有できるようになり、とても貴重な体験であり、濃い国際交流ができたこと、スウェーデンで世界各国の様々な分野の学生と一緒に学べたことが、自分自身の今後を考えるきっかけになったことなどを報告された（関連記事が 16 ページにあり）。

（文責：農学部あらた同窓会常任副会長 富永 茂人）



学生向け講演会会場風景（左下は畠田谷先生）

の講義で学んだことも活かして頑張っていけたら良いなと思っています。

園芸生産学講座

「大学生活を振り返って」



果樹園芸学研究室

学部4年 加治屋 綾乃

大学に入学して3年半がたち、振り返ると様々な経験をし、有意義な時間を過ごしたと思う。実家を離れ、一人暮らしを始め、何も分からなかったときと比べると成長したと思う。

私が最も印象に残っているのはアルバイトである。3年のころまではアルバイトを掛け持ちし、多くの時間をアルバイトに費やした。計4つの職場で働いたが、その中で出会った友人たちは高校までや大学内でできた友人とは違った。同年代で社員として働いている人、フリーターの人、専門学校生、資格取得のために勉強している人、通信制高校や夜間学校に通っている人など私の知らない環境や世界を知っている人たちだ。彼らの話や考えはどれも新鮮で、私自身の考えも柔軟になった。みなそれぞれ目指すところは異なるが自分の信念や目標を持って努力しており、尊敬する部分が多くあった。特に、すでに社会に出て働いている人の話は参考になり、進路選択に大きな影響を与えてくれた。他にもアルバイトで学んだことはマナーや責任感、働くことの大変さなど多くある。社会に出てからこんなに様々な職種を経験できることはないと思うので、多くのアルバイトに挑戦してみてよかったと思う。

4年になると研究室中心の生活になった。研究室の活動は外作業も多く、実験がうまくいかないときもあり、挫けそうになるときもあるが、今後こんなに知識や技術のある先生たちや恵まれた仲間たち、多くの研究設備のある環境で研究できることはないと思うので、思い残すことのないよう精一杯研究をして大学生生活を終わりたいと思う。また、自由に時間を使える今だからこそできることをしたい。私は海外旅行をしたことがないことが心残りなので、残り半年間で海外旅行を実現させたいと思う。

Vival Campus life

ビバ! キャンパスライフ

生物生産科学科(農業生産科学科)

応用植物科学コース

「3年間の大学生活」



植物栽培・機能学研究室

学部3年 松尾 遥花

私は福岡の町から鹿児島へやってきました。最初に市内にやってきた頃は、なんて賑やかな街なのだろうとウキウキした一方、今からこの土地で一人暮らしでできるだろうかという不安な気持ちもありました。一人暮らしの生活を送っていく中で家事や料理等を自分以外にしてくれる人はいないのだと実感し、こんな状況を体験して初めて家族のありがたさというものを知りました。

このような感じで始まった大学生活の中で、私はたくさんの人たちと出会いました。学科やバイト先など出会いは様々でした。その中でもサークル活動は色々な人と関わりを持ったきっかけの1つです。1年生の時に偶然声をかけてくれた友人に誘われ入ったのが始まりで、サークルではメインのバドミントンの他にドライブやキャンプなど季節ごとにイベントがありました。気づけばこのサークルで大学生活3年間たくさんの思い出が出来ました。サークル以外では、長期休暇中に学科の友人と旅行へ行くということもありました。どれも楽しく有意義な時間を過ごしました。それも人との出会いがあったからこそだと感じ、とても感謝しています。

また学問の面では、高校時代に農業について学ぶことがなかったので毎日の授業では知らないことばかりでしたが、日々新しい知識を得られたので嬉しく思いました。授業の一つであった実習も初めてのことで、トラクターなどの機械を扱ったり、自主栽培で野菜の育て方を学んだりし、多くの貴重な体験ができました。

3年では研究室も決まり、内容もより専門的になって難しくなり、卒論等もあって大変になると感じますが、それらに向けてさらに知識を深めていき、今まで

病虫害制御学講座



「大学生活を振り返って」

害虫学研究室

学部4年 清水 祐里

私は大学に入るまで田んぼすらろくに見たこともないほど農業とは無縁でした。なので、フィールドワークが中心で実際圃場に出て作業することが多いこの生物生産学科に入ってからというもの、未知との遭遇の連続でした。鋤と言われてもどのようなものかピンとすらこなかった当時の私にとって、畝の立て方、わき芽のとり方、作物の収穫の仕方など、実習で学んだ一つ一つのことが新鮮で、その作業すべてがこれまで生きてきた中で初めての体験でした。

この未知との遭遇は害虫学研究室に入ってからも続きました。3年生の前期に行われる昆虫採集で、人生で初めて使う虫取り網を構内の人の往来に臆することなく振り回したり、その捕獲の際スズメバチをデコピンで気絶させたり、3年生後期の実験では飼育していた蛾の幼虫の共食い現場を目撃してしまったり、と以前よりもグレードアップした初体験が私を待ちうけていました。さらに、「害虫学研究室」と聞いて想像していただければおわかりのように、所属しているメンバーのクセがすごいのです。圃場で捕ってきたであろうバッタを素揚げしたものがお昼の時間に回ってくる、アブラゼミをフライパンでコロコロ焼いて食べている、私の思考レベルを遥かに超えた事象がこの研究室では日常茶飯事で繰り広げられています。まさか素揚げをしたバッタの脚の風味はエビっぽい、アブラゼミの身は淡泊な魚みみたいな味だ、などと感想が言える日が来るとは想像もしていませんでした。

このように、今まで知らなかった世界を見て経験値を積んだことで、知識の幅が広がり、様々な感性が鍛えられ、それによって以前より人間的に強くなれたように感じます。このことがこの4年間での一番の収穫だと私は思っています。

畜産科学コース



「3000円を けちるんじゃなかった、、、」

家畜管理学研究室

学部3年 小澤 優作

私の自転車人生で最も印象に残っている日本縦断のある日の出来事について書きたい。

その日は一日中雨だった。普通なら無料キャンプ場に泊まるのだが、雨も降っているので外に泊まって濡れるの嫌だな、と友達とは必死に宿探しを始める。しかし、私は金欠で宿代を出すのも惜しいという状態だった。友達は最寄りの1泊約3000円の宿を探してくれたがそれすらも出しくななかった。「たった3000円くらいケチるなよ」と完全に私を馬鹿にした様子。意見が分かれたので別々に泊まることに。

分かれた直後はほとんど雨が降っていなかった。しかし、10分後、目の前が見えなくなるくらいの激しい雨、雷。とても自転車なんて漕げる状態ではなかった。しかし、今更、引き返し友達と一緒に泊めてくれと言えない。でも、この状況では先に進めない。どうしたものか。色々考えた結果、近くにお寺があったのでそこに泊めてもらうことにした。

お寺の人に事情を説明すると、お寺の前にテントを張ることを許可してくれた。雨の中を1日中自転車に乗って疲れ切っていた私はすぐに眠ってしまった。30分後、ふと目が覚め、外の様子を確認すると小降りになっていた。安心して再び眠りに就こうとすると、ひたひた、ひたひた、と私のテントの周りで誰かが水たまりの中を歩いているような音が聞こえた。誰だろうと外を見るものの誰も居ない。気のせいかなと思いテントの中には入るとまた、ひたひた、ひたひた、音が。雨の音が足音に聞こえるだけだと思っていたが次の瞬間、テントの上に誰かがのしかかった様にへこんだ。何何何何、、慌てて外に出るもやはり誰も居ない。祟りだ。これはここに泊まるなという祟りなんだ。完全に怖じ気づいてしまった私は急いでテントを片付けて宿に泊まっている友達に連絡。結局、宿に泊まることになってしまった。宿で再会した友達の顔は今でも忘れない。

たった3000円をけちるんじゃなかった、、、

農業経営経済学講座



「素晴らしい4年間で ありがとうございました。」

農業経営学研究室

学部4年 彌富 泰宏

『鹿児島』をめいっぱい吸収した4年間でした。桜島、黒豚、仙巖園、知覧。まるで観光客のように鹿児島を満喫しました。さらに、初めての自炊やバイト。最初はその全てにどこか1人の心細さを感じながらも次第に充実していきました。それと同時に親や家族の温かさを身に染みて感じています。

私は浪人したことで、1年生の時は『(1年上の)現役生には負けないぞ!』と意識し、経験を積める機会を探していました。

私を一番はじめに成長させたのは、1年生の夏、国際協力体験講座でタイへ渡航したことです。そこで当事者意識の大切さと質問する大切さを学びました。ジャズバンド部への入部は私の大学生活で最も重要な出来事の1つです。ジャズを知ったおかげで、旅先や帰省した折、現地のジャズ喫茶へ行き、即興演奏に興じるという趣味が出来ました。

幸運なことに、私は4年間の大学生活で、これからを生きる上でいくつか大切なことに気づきました。それは、『好奇心を止めない事』と『自分を原点に立ち返らせる手段を持つこと』です。

『好奇心』は誰にでも湧き出る感情です。例えばそれは、より深く学びたいという物事に向くこともあれば、よりその人のことを知りたいと、人に向くこともあるでしょう。私はすべての選択や今いる場所というのは、なにかしらの『好奇心』からすべてが始まっていると考えています。ですから『好奇心を止めない事』は、色んな物事に興味関心を持ち、自分の人生をより豊かにしてくれるものであると確信しています。それは、自分が‘ハマる’ものと出会うきっかけにもなるでしょう。

私にとって『自分を原点に帰らせる手段』それは、本・音楽・映画です。人間関係や就職活動など気分が沈むときは沢山ありました。そんな時は必ず原点に戻ります。そうすれば冷静になり、次への一步を踏み出す少しの勇気を貰えるのです。これらの大切なことは、生涯私の強い味方になってくれると信じています。

最後までお読みいただきありがとうございます。ぜひ皆さんも『好奇心』を爆発させ、時には『原点』に戻り

ながら、大学生活や日々の生活を楽しんでください。

4年間で出会えたすべての人に感謝しています。本当にありがとうございました。



生物資源化学科(食料生命化学科)

生命機能化学講座



「かけがえのない日々」

応用分子微生物学研究室

学部4年 鮫島 かな

サークル活動。それは、私の大学生活の中で最も楽しく、充実した時間でした。高校時代からギターを弾くことに憧れており、バンドがしたいと話していた中学時代からの友人とバンドサークルに入部することを決めました。そのサークルは、「Folk Song 同好会」です。サークルに入ってから、ギターは弾きたいけどバンドを全く知らなかった私に、先輩がCDを貸してくださったり、ライブやフェスに連れて行ってくださったりと、音楽に触れていくうちにギターもバンドもどんどん好きになっていきました。また、定期的に行われるサークルのライブを見る度に、この先輩みたいなカッコいいライブがしたいと、ギターを弾くことの虜になっていきました。特に、1・2年生の頃は、ギターをうまく弾けるようになりたい、先輩方にギターを教えてもらいたいという一心で、毎日のように部室に通っていました。

そのような日々を送る中で、最も印象に残っていることがあります。2年生の夏に、1学年上の先輩と一緒にバンドを組もうと誘ってくださったことです。その当時は周りにはギターが上手な人ばかりで、自分の演奏に自信が持てずにいました。その時に相談に乗ってくださり、「楽しめるライブをしよう」と誘ってくださったのです。先輩方がたくさんサポートしてくださり、お褒めの言葉だけでなく、厳しいお言葉も頂きながら一生懸命練習しました。サークルで行われたライブで発表をしたときには、少し悔しい思いもしましたが、自分の成長を感じることができました。

サークル活動を通して、仲間たちを信じることの大切さを得ることができました。様々な仲間たちと目標に向かって努力したり、朝まで語り合ったり、ときにはドライブやキャンプをして笑いあったりと、仲間たちと過ご

(8) あらた同窓会学生向け会報

したその時間は、私の大学生活の中でかけがえのないものであり、人生の中でも最も大切な日々でした。

食品機能化学講座



「学生生活を振り返って」

食品分子機能学研究室
学部4年 二原 萌莉

大学に入学してから、アルバイトやサークルなど初めての体験をし、そこから多くのことを学んできました。その中でも、私は所属していたサークルである学友会管弦楽団との出会いが最も印象に残っています。

入学当初、私は音楽系サークルに入りたいと思っていました。そのような時、入学式で管弦楽団が学生のみで演奏しているのを聴いたことがきっかけで、自分もその中で演奏がしたいと思うようになり入団しました。ピアノしか習ったことのなかった自分は、ほぼ初心者でありながらも打楽器パートとして、練習に打ち込んできました。私は初心者だからという言い訳をしなくなかったことから、1年生のときは特に練習に励んでいました。

本楽団では年2回の定期演奏会を行っており、プロの指揮者を外部から呼び寄せて演奏を行います。プロによる演奏指導のおかげで本格的な演奏と共に、さらなる楽器の上達を目指すことができました。当初、ただピアノ以外の楽器をやってみたくていただけの自分が、今では、様々な打楽器を団員と巧みに演奏できるようになっているとは想像もつきませんでした。この演奏会でひたすら経験者と同じレベルに立つための地道な練習の成果が1番実感できる場でした。また、夏休みには鹿児島県内の小学校を訪問し、演奏を届けてきました。先生や子供たち、地域の方々と楽器を通じてふれあい、音楽の面白さや楽しさを共有することで改めて音楽並びにクラシックの良さを感じる事ができました。

本楽団は年間を通じて様々な行事があり、その演奏に向けて部活のように練習に取り組んでいます。時には思うように技術が向上せず苦しい時もありましたが、先輩・後輩に支えられてここまで続けることができました。鹿児島県内では学生主体のオーケストラというのは本楽団のみで、ここで演奏できたことが本当に貴重な経験です。残りわずかですが、サークルの仲間と良い思い出をさらに作っていきたいです。

食糧生産化学講座



「一人のすゝめ」

植物栄養・肥料学研究室
大学院修士2年 角 一機

冬になると鍋が食べたくなります。大学生となり一人暮らしを始めるまで鍋は家族と囲むものでした。食材についてうるさく言うつもりはありませんが、こだわりが一つ。それは鶏肉をくたくたに煮ることです。うま味をスープに出し切り、ほろほろと崩れるだけの鶏肉を私は妙に愛おしく思います。

皆で鍋をわいわい囲むのは実に楽しいものです。同じ鍋をつつくと交友が深まるのは間違いありません。ですが、一人でというのも存外悪いものではないと思うのです。調理が簡単で野菜も取れて身も心も温めてくれる。一人暮らしでこれほど助かることはありません。何より自由があります。こんなことを言うと心が狭いと思われるかもしれませんが、好きなものを好きなだけ食べられるというのは幸せなことではないでしょうか。

同じように私は一人飲みも好きですが、否定的な人も多くいます。かくゆう私も最初は否定派だったのです。一人で酔ってなにが楽しいものか、と。皆で飲み語らうことこそ楽しいのだと思っていました。しかし、飲み会となれば、やれ先輩のグラスが空だとか、やれ盛り上げるために飲めだとか。人に気を遣う場面が多々あります。そこから学ぶことももちろんありますが、疲れてしまうのもまた事実。しかし、一人飲みにもそういったものは何もないのです。あるのは酒と肴と私だけ。どの酒にどんな肴が合うのか大した知識があるわけではありません。それでも、誰に気兼ねすることなく純粹に酒と肴、そして自分自身に向かい合う時間を私はとても素敵なものだと感じます。

昔に比べ、人間関係が希薄になったという人がいます。事実そうなのでしょう。だからこそ、家族や友人たちと囲む鍋や飲み会は大切だと思います。それを否定はしません。大いにやるべきです。一方で、SNS等で他人と四六時中繋がっているともしえる現代、本当の意味で一人になる時間も同じように必要ではないでしょうか。スマートフォンをベットに放り投げ、他人に気を遣わず、自分勝手に食べて飲む。そんな一人の時間に浸ってみるのもよいものです。

焼酎学講座



「私の大学生活」

焼酎製造学研究室

大学院修士2年 岩崎 史奈

私は生まれ育った奄美大島をはじめて出て鹿児島大学に入学しました。変化を好まなかった私にとって、当初の生活は不安でいっぱいでしたが、それから約4年半が経ち、思っていた以上に成長することができたと思っています。

1・2年生の時はただ真面目に授業を受け、何となく過ごすだけの日々でした。何か目標を持って活動すれば良かったとも思いますが、そのような中でも発見はあり、微生物に関する授業や蔵見学をきっかけに、現在専門にしている焼酎製造に興味を抱くようになりました。目に見えない微生物の力を利用する発酵や、地域に根差した焼酎文化は私にとって非常に魅力的に感じられました。

3年生の時、希望していた焼酎製造学研究室に配属されましたが、ここで予想していなかったチャンスが訪れました。4年生になる前に大学院の入学試験を受けることができる、いわゆる「飛び級制度」の利用です。これによって私は大学院に進学することになりました。真面目に授業を受けてただけで、研究に向いているかまだわからない私が進学を決めてよいのか、迷いもありましたが、同じ選択をした先輩方の姿を見て進路を決めることができました。大学院に進学してからは、黒糖焼酎に関する研究に取り組んでいます。学会発表の機会もいただき、貴重な経験となりました。

これ以外にも、所属する裏千家茶道部で茶会運営に携わったことなど、数多くの経験を得ることができました。時には自分の欠点がどうしても嫌になり、苦しいこともありましたが、周囲の人々に助けられながらゆっくりとですが良い方向に変わることができていると思います。一番の成長は以前より自分に自信が持てるようになったことです。本当に恵まれた大学生活でした。これからもここで学んだことと感謝の念を忘れず、少しずつ経験を重ね、より良い自分になりたいと強く思います。



生物環境学科(農林環境科学科)

森林科学講座


「わたしの
ビバ・キャンパスライフ」

森林計画学研究室

大学院修士2年 山田 誠太郎

重さ100kg超えの丸太を1人で担ぎ、2階建ての屋根を作るカナダ原住民出身のおじさん。彼の部族に伝わる黒いテントの中に焼石を置き、サウナをしながら数時間合唱し続ける宗教行事は興味深く、ひどく熱かったのを覚えている。毎日10kmをサンダルで走るドイツの森林管理官のおじさん。環境保全の大事さを伝える話は長かったけれど、その真剣な姿はかっこよかった。「山が荒れるのは駄目だ」と口をそろえる鹿児島県の林業に携わるおじさん達。なまりが強く何を言っているのか分からない時もあったが人情味が溢れていた。

大学生活を振り返ると思い出すのはそういった魅力溢れる「おじさん」達だ。そして今思うことはそういった「おじさん」に自分も将来なりたいということだ。

千葉の実家を離れ、今日まで鹿大内外で過ごした6年半。部活動ではサックスの演奏に明け暮れ、林産業に関するインターン、学内の林園での竹を使った灯籠やそうめん流しの企画・運営、バイトで貯めた資金での休学中のカナダ・バンクーバーへの語学留学、悔しい結果に終わった就職活動、ドイツ・ロッテンブルグ大学への正規留学など数多くの経験をした。同時に数多くの人との出会いが私の振れ幅を大きくした。

これら経験の中で私の糧となった学びは「矛盾してもよい」ということと「チャレンジすること」だ。この6年間で「やりたいこと」と「やっていること」が矛盾することは頻繁にあった。また、そもそも「やりたいこと」が何なのかわからないときもあった。しかし、目の前にあったチャンスにチャレンジし続けた。それらのチャレンジは必ずしも良い結果で終わったものばかりではなかった。しかしチャレンジの度に得るものがあり、そして少なくとも「後悔しない方法」は見つけることができた。

卒業後は民間会社で森林の管理者として働く。目標としていた職業であり、わくわくするが、同時に不安もある。変わらずチャレンジしていこう。

環境システム学講座



「大学生活を振り返って」

農業環境システム学研究室

学部4年 岩切 祥人

僕の大学生活は発見と挑戦の連続でした。何か大きなことをしたというわけでもないですが、この四年間は今後の僕の人生への大きな起点となったのではないかと感じます。

大学の講義では、専門や共通教育を受講したことで様々な知識を身に付けることができ、考える力を備えたことで論理的思考を鍛えることができました。特に、農場実習はとても良い経験になりました。これまで講義で話を聞く程度でしかなかったのですが、実際に農場に出て野菜を育て、果物を収穫するという体験は、かけがえのないものとなりました。

また、私生活では音楽や料理といった趣味をすることができました。特に、料理に関しては、飲食店のアルバイトを数年続けてきたことで、お客さんに自分が作った料理を提供した際に「美味しい」と言っていただけることに喜びを感じ、成長することができました。料理を作ることの楽しさと他の人に美味しいと思ってもらえる喜びは、アルバイトを経験してみなければ得られなかったものだと感じます。

さらに、アルバイトでは飲み物を提供するため、アルコール類の知識を多く得ることができました。僕はお酒がとても好きなので、難しいお酒の名前や味を知っていくことに苦なことはありませんでした。特に、ウイスキーとの出会いは僕にとって最高の感動でした。数あるお酒の中で最もハイボールが好きになりました。いつの間にか家に多くのウイスキーがあり、毎晩のように飲むことが日課となってしまいました。

現在は、卒業研究に取り組んでいます。自分の好きなことをとことん追究することができているのでとても楽しい日々を過ごせています。農場実習を経験したこと、料理を作れるようになったこと、アルバイトをしたこと、これらがあったから今の自分の研究が存在しています。わからないことやうまくいかない時もありますが、教授の先生を含め多くの人の助言やサポートに助けられています。大学を卒業したときに、悔いの残らぬよう、この研究を最高の出来に仕上げたいと考えています。

生産環境工学講座



「大隅半島南部での ディープな1週間」

農地工学研究室

学部4年 板井 雄太郎

私の大学生活は、様々な出会いがあり、多くの経験ができた4年間でした。学業だけでなく、バイトやボランティアなどにも取り組んできました。その中でも一番印象に残り、自分を成長させてくれたのは、調査のために行った大隅半島での1週間です。

調査地は県内の中でも過疎・高齢化が進行している肝付町と南大隅町でした。その周辺には宿泊施設がなく、泊まる場所は廃校でした。災害時の避難場所となっているため、電気や水道は使えましたが、風呂や洗濯はできません。またスーパー、コンビニ、自販機もないため自分が欲しいものをすぐに手に入れることができない環境でした。こんな場所で1週間も過ごすと思うと最初は不安で一杯でした。しかしそんな不安をすぐに取り除いてくれたのは、近所に住む方々と一緒に調査を行った学生と先生方の優しさでした。近所の人々は風呂や洗濯機を嫌な顔することなく貸してくれました。また、その時にお茶とお菓子を出してくれていろいろな話をしてくれました。さらに、その地で捕まえたイノシシの肉でバーベキューを開き、なかなか食べることでできないジビエ料理をいただきました。学生や先生方とは調査地に出発する当日に初めて会いましたが、寝食を共にすることですぐに仲良くなれました。私は一人暮らしなので、大学生活で1週間夜まで多くの人と話すことはあまりなく、様々な意見を聞くことができました。このように多くの人の優しさに触れ、今まで聞いたことのない話や経験したことのない貴重な体験をすることができました。

私は来年から国家公務員として働きます。その時には職場の人たちだけではなく、国民の方々と接することになります。楽しいことや嫌なことがたくさんあるでしょうが、この調査で感じた人々との繋がり大切さを忘れずに、一生懸命やっていきたいと思います。



国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)


「国際食料資源学特別コース
での4年間」

害虫学研究室

学部4年 藤井 雄介

私は小さいころから自然が好きで、公園で友達と遊ぶより、川や林に行き釣りや虫取りをするような少年でした。そのような中、私は中高6年を都心部で過ごし、その際に自然と社会とが隔離された現状を目の当たりにしました。それをきっかけに、人間と自然の共生について考えるようになり、その一つの形態が“農業”であると感じました。また、日々の生活で地球規模での環境問題が大きく取り上げられているため、グローバルな観点における農業を学びたいと感じるようになり、このコースを志望するに至りました。

このコースでは1年次の香港の食品企業へのインターンシップや2年次のフィリピンへの語学研修など、海外に出ていける機会が多いことが魅力の一つです。日々の授業では、英語を扱う科目や海外の農業に関する授業も多く受講することが出来ます。

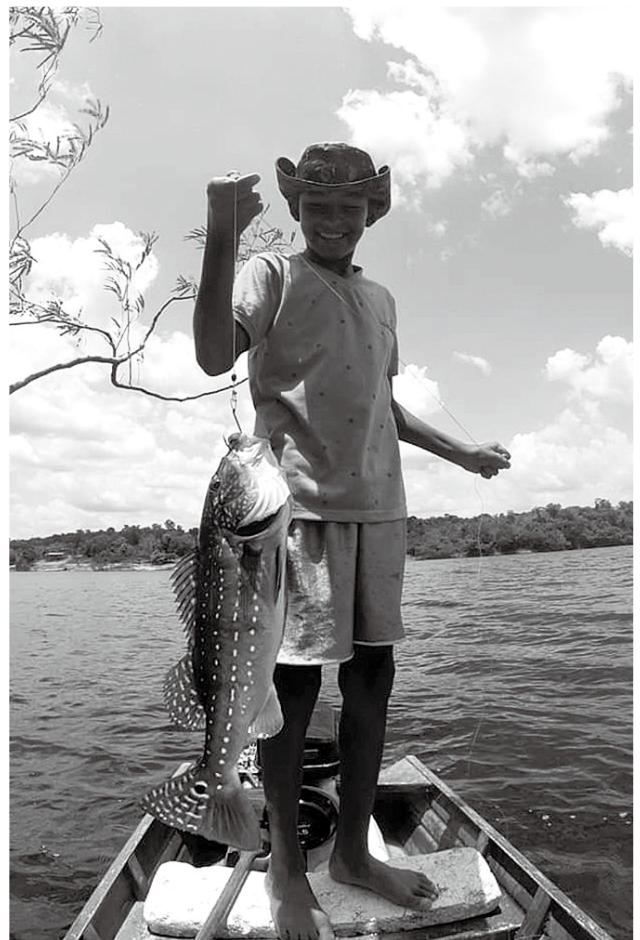
私はそんな授業の中で“アグロフォレストリー”というものに出会いました。これは農林複合経営ともいわれるもので、森林を保護しつつ、作物を栽培する農法のことです。まさに自然と人間との共生が実現されている農業であると感じ興味を持ちました。しかし、アグロフォレストリーに関して自分なりに調べてみたものの、文面や写真から得られる情報だけではイメージが付きませんでした。これがきっかけとなって、私のブラジル留学が実現し、現在、ブラジルのマナウスにいます。ポルトガル語の勉強はもちろんのこと、現地の大学で農学部の授業を履修しています。また、幸運にもこちらでアグロフォレストリーについて研究をなさっている日本人の方とお会いすることで、先月同行させていただき、マニコレという小さな町でアグロフォレストリーの現場を見ることが出来ました。このプロジェクトでは、マニコレの町全体で農業による収益の増加を見込めるシステムを構築するというのが、主な目的となっていました。またこれからは、トメアスーという場所にあるアグロフォレストリーが盛んな地域に1週間ほど滞在する予定です。

このような形で中学高校時代から思っていたことが、実現できていることを本当にうれしく思っています。と同時に、留学を含めた充実した大学生活に携わっていた

だいている多くの人に感謝の気持ちでいっぱいです。また、後輩たちにもぜひこのようなチャンスを最大限活かし、世界へと飛び出し、貴重な経験をして欲しいと思っています。



マナウスで有名なアマゾン劇場前



アマゾンでの釣り

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習を振り返って」

生物生産学科 病害虫制御学講座
害虫学研究室
学部4年 宮崎 美樹

私は5月下旬の2週間、母校で教育実習を行いました。高校時代に過ごした風景に懐かしさを感じつつも、教師としての在り方や授業はうまくできるのかといった漠然とした不安を抱えながら実習に臨みました。私は実習を通して教師という仕事の大変さややりがいを感じました。

最初の授業の前に自分なりの万全の準備を行い、授業に臨みました。しかし、いざ教壇に立って授業を始めてみると、生徒に上手く説明できない部分が多々あり、生徒の分からないという表情から自分の授業準備の不十分さを身に染みて感じました。授業後、指導教員から「自分で授業内容を説明しすぎ。もっと生徒に発言させて、生徒に考えさせる授業をやりなさい。」と言われました。その後見た先生方の、生徒の様々な発言から授業につなげていく豊富な知識量と授業展開の巧みさは圧巻でした。そこで、次の授業では多くの生徒の発言をもとに授業を展開していけるよう、教材研究に加え、発問の内容やタイミングを考えて再び授業を行いました。授業中、生徒が質問に対して予想以上に答えてくれたため授業を展開しやすかったものの、発問に対する生徒の意見が想定外の時、うまく生徒の意見を授業に反映できないこともあり、やはり自分の授業準備の甘さを痛感しました。多くの時間を割いて授業準備を行っている先生方の「教材研究に終わりはしない」という言葉の重みと、教師という仕事の大変さと責任を改めて知りました。しかし、生徒から「先生の授業分かりやすかった。面白かった。」と言われたときの喜びはひとしおで、これこそが教師としてのやりがいだと思いました。

この2週間、普段の大学生活では味わえない貴重な経験をすることができ、多くの事を学びました。私が無事実習を終えられたのは、指導教員をはじめ、周りの方々の支えのおかげです。今回の実習で学んだことを残りの大学生活、そして将来に活かしていきます。



「教育実習での収穫」

生物資源化学科 生命機能化学講座
応用分子微生物学研究室
学部4年 榎木 まどか

農業科教員免許取得を目指す私は、6月4日から2週間、母校で教育実習に参加しました。母校には、高校3年間担任としてお世話になった恩師（私は恩師の影響を受けて教員になることを志しました）がおられ、共に過ごせた2週間は、喜びでいっぱいでした。

農業高校では、放課後に行われる当番実習（ジャガイモ収穫やサバ缶製造など）があり、私も初日から参加しました。生徒と会話する機会が多い当番実習のおかげで、教育実習の早い段階で、生徒との心の距離が縮まりました。そして、私の「生徒の力になりたい」という気持ちは、より強くなりました。

実習に参加した時期は、3年生が進路について考える時期でもあり、私に相談してくれる生徒もいました。「教員の言葉が生徒の人生を左右する」という責任を感じた私は、生徒にどう伝えれば良いのかを考えることも多く、積極的に先生方に相談して対応しました。先生方からは「自分の経験談を話してあげたらいい」という助言をいただき、「自分自身の経験が、生徒の役に立つのかもしれない」と強く感じました。この経験は「これからの人生も、生徒にしっかりと伝えられるようにしなければならない」と考える良いきっかけとなりました。

指導案の作成や授業の準備には、特に時間を費やし、朝早くから夜遅くまで大変でした。また、多くの先生方の授業を参観し、要点のまとめ方や時間配分等も学びました。こうして臨んだ50分間の研究授業は、いざ教壇に立ってみると、あっという間に過ぎました。授業後、「先生の授業、面白かった」という生徒からの言葉によって、「教員は、生徒と共に支え合う関係なのだ」と感じました。「それぞれの授業スタイルがあり、これが正解という授業はない」という恩師からのご意見を含め、他の先生方からも多くの貴重なご意見をいただきました。今後は、これらのご意見を参考にして、「自分にしかできない授業を展開し、生徒たちに最高の時間を提供できる教員」になることを目指します。

教員になりたいという夢に一步近づけたことを実感できたことや、上述した初めての経験、先生方や生徒たちと過ごせた時間が、私の「教育実習での収穫」です。



「教育実習を終えて」

生物環境学科 生産環境工学講座
利水工学研究室

学部4年 久保 文哉

私は今年6月に母校である熊本県立八代農業高等学校で教育実習を行ってきました。私自身、高校時代というものに思い入れが強く、当時の先生方に大きな影響を受けたことが教員を目指すきっかけになりました。しかし、当時の先生方は母校には一人もおられず、知らない先生方ばかりで、どこか活気のないように感じました。なので、私は後輩である生徒たちに自分にしかできない形で熱いメッセージを送ろうと心に決め、教育実習に臨みました。

「生徒たちに何をどのように伝えるのか」を自分なりに考え、まずは今の生徒たちについて知ることから始めました。そのために、実習前から先生方に生徒たちの現状をお聞きし、実習が始まってからは学年・学科問わず色々な生徒と話すことを心掛けました。そこからわかったことは、予想通り、元気がある生徒が少ないということでした。「将来の夢」だったり、「こういう仕事をしてみたい」という想いを持った生徒はほとんどおらず、部活も遊び半分にしか私には見えませんでした。授業中の態度はクラスによって多少差がありましたが、全体的に、とりあえず授業を受けている感じがしました。正直ショックを隠せませんでした。先生方を含め今の生徒たちを教育してきた大人に原因があるのではないかと推測しました。

その後は、「生徒たちの心に火をつける」ことが私の目標になりました。口で言うほど簡単なことではありません。ここで私が取った行動は「全力で取り組む姿を見せる」ことでした。授業では緊張しつつも生徒が理解してくれるまで質問にも対応して、資格試験準備のための課外授業でも積極的に指導し、部活ではサッカー部で「指導」というより「一緒に練習」をして、手加減なしで本気でぶつかり合いました。生徒の中には私のことを好まない生徒もいたと思いますし、生徒の心に火をつけることができたかはわかりません。しかし、この2週間が生徒たちの今後に少しでも影響を残せば、それだけで実習に行った価値はあったと思っています。私も後輩たちに追い越されないようこれからも頑張ります。

インターンシップ



「インターンシップを終えて」

農業生産科学科 食料農業経済学コース
農業経済学研究室

学部3年 榎田 浩人

私は夏休みの5日間、鹿児島県庁の農政部経営技術課でのインターンシップに参加させていただきました。このインターンシップに参加した目的は、私が大学で学んでいる分野の実情を知るとともに、約半年後から始まる就職活動の手助けになるのではないかと考えたからです。

鹿児島県庁の農政部経営技術課には5つの係があります。私はインターンシップの5日間でこの5つの係の中から1日1つずつの係をローテーションで体験させてもらいました。主な活動は資料整理、「スマート農業シンポジウム」の準備、「企業等の農業参入研修会・相談会」への参加などです。この中で私の印象に1番残ったのは「企業等の農業参入研修会・相談会」でした。今、鹿児島県では「農福連携」の推進を進めているそうです。「農福連携」とは福祉事業所の障害者らに農業生産の担い手になってもらうという取り組みです。この研修会・相談会には新規就農を考えている多くの企業が参加しており、実際にその中の数人からお話を聞ける機会もありました。この研修会・相談会が1番印象に残っている理由は、現場の人間のお話を実際に聞くことができたからです。大学の授業でも農業の担い手についての問題を取り扱うことがあります。しかし、授業の中では統計的な資料を見たり、インターネットから関連資料を探したりといったことはするが、なかなか現場の人間の話を知ることができる機会はありません。現場の人間の話を知って、新規就農の壁は思っている以上に高いということに驚きました。また、自分自身の知識不足も痛感しました。

最初は長いと思っていたインターンシップもあっという間に終わってしまい、その短い期間の中で多くのことを学び、多くのことに気付くことができました。最後に、今回のインターンシップでお世話になった職員の皆さんに感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



「インターンシップを終えて」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
植物栄養・肥料学研究室
学部3年 小田口 茉由

私は、今年の9月3日から2日間、鹿児島市役所でのインターンシップに参加させていただきました。参加させていただいた理由は、主に2つあります。1つ目は、私の住む鹿児島市の公務員の方々はどのような仕事をされているのか、実際に見て、体験してみたいと思ったからです。2つ目は、就職活動に向けて社会勉強を積むと共に、自分の課題を見つけ、これからの自分にできることを探すためです。私は今、大学で農業を専門に学んでおり、今回、産業局農林水産部という部署に参加させていただきました。こちらの部署には、農政総務課や生産流通課など様々な課がありました。

インターンシップでは、鹿児島市の農林水産業の現状や地域ごとにとれる特産物などについて学ぶ勉強会や、桜島に行き自然や動物の被害対策、農家の方へのアドバイス、地図上に描かれている作業地が正確かなど実際に見て確認するという体験もさせていただきました。私は、市役所の職員の仕事はデスクワークのみで鹿児島市を支えていると思っていました。しかし、インターンシップを通して、デスクワークだけではなく、直接、現地に行き、一般市民の方や農家の方の話を聞いたり、コミュニケーションをお互いに取ったりすることで連携が成り立っているということを学びました。職員の方が、時には苦労することもあるが、成功したときの達成感は大きいとおっしゃっていました。このように、農家の方などと協力して事業を進めていき、ともに喜びを感じ合えるのはこの仕事ならではの良さだと実感しました。

この2日間、初めて見たり、聞いたりすることばかりでとても新鮮で有意義な時間となりました。この経験を、今後の学校生活や就職活動に生かしていきたいです。

最後になりますが、大変お忙しい中、丁寧にご指導してくださった鹿児島市役所の方々に「ありがとうございました」とお礼を言いたい。



「インターンシップを終えて」

農林環境科学科 森林科学コース
育林学研究室
学部3年 若松 美穂

私はこの夏、“森林キャリアデザイン”という授業の一環で9月25日からの3日間、熊本県森林組合連合会のインターンシップに参加した。私の出身が熊本県であり、将来、熊本での就職を考えていることと、2年生の春、宮崎大学で催された企業説明会において伺った業務内容から、大学で学んだことを活かして働くことのできる環境だと考えたため、実際の現場を体験したくてここを希望した。

内容は大きく分けて2つあった。一つは立木買取調査で、森林所有者の方から依頼のあった場所での現地調査や実際に市場での市況調査、コストの算出と最終的な現地の買取評価の3業務だった。もう一つは森林・山村多面的機能発揮対策交付金説明会での簡単な補助や来年に向けた各組織へのヒアリングだった。立木買取調査では大学で学んだことを活かせる機会が多くあったが、まだまだ知識不足であることを痛感した。

印象に残っているのは、森林組合にとって組合員の指導は必須事業で、業務の中で組合員の方との信頼関係は大切ということだ。働いている方々は、依頼主の組合員の方々に寄り添いながら、家族のように接している方々ばかりだった。森林のことを学んでいる側からすれば当たり前前のことを知らない方にどのように指導・説明して、納得してもらうかや高齢者の方の多いこの業界でそれらの方々にどう適応して行くかなどを考えることが欠かせないそう。難しいとも感じたが、どの現場でも皆さん生き生きとしていて、とてもやりがいのある仕事であることが伝わってきた。

この先、卒業した後、林業職に就くとすれば森林組合とはどこかで接点があるだろうし、それでなくても林業職の基本としての業務を現場でさせていただく貴重な機会を設けていただいた。既存の業務があるにもかかわらず、ご指導いただいた熊本県森林組合連合会の皆様には本当に感謝している。この経験で学んだことを忘れず、今後活かしていきたい。

介護体験記



「介護体験実習を終えて」

生物環境学科 生産環境工学講座
利水工学研究室
学部4年 酒匂 弥生

夏休みに介護体験実習を受けてきました。この介護体験実習は中学教員免許を取るのに必要な実習の一つで、9月17日～21日の5日間デイサービス「おじゃったもんせ」にお世話になりました。

デイサービス「おじゃったもんせ」では朝7時55分に朝礼が行われ、順次スタッフが利用者様を車で迎えに行きます。施設に到着された利用者様の血圧と体温を測り、お風呂に入れ、午前に体操、塗り絵をし、お昼ごはんを皆で食べ、昼寝を挟んで午後にまた体操をし、日ごとに変わるレクリエーションを楽しみ、お茶を飲み、午後4時30分までに利用者様を車で送ります。私は、体操と昼食の準備、レクリエーションに参加しました。

1日目、初めての運動の時間でラジオ体操の音楽が流れたとき、特に意識することなく立ち上がりましたが、皆さん座ったままであることに気づき座りなおしました。利用者様の足が不自由であるということがまだ意識できていなかったのです。椅子に座った状態での運動は初めてで、運動になるのか？とと思っていましたが、やってみると体の筋肉を使い、終わるころには体も温まっていました。歌を歌いながらの運動もあり、これなら楽しみながら運動を続けられそうだと感じました。

昼食の時、配膳の手伝いをしようとお盆を持つと「それは〇〇さんね」と声をかけられました。よく見るとミキサーで液状にしたり、量を調整したりしているお膳があります。利用者様には固形物を食べることができない方や多く食べることができない方がいらっしゃいます。そのため利用者様一人ひとりに合わせた形で用意しているようでした。

レクリエーションはスタッフが日替わりで担当しますが、なぞなぞの日やボール掴みの日などがあり、利用者様がいつでも楽しめるような工夫がされており、利用者様同士のコミュニケーションの場にもなっていました。

「おじゃったもんせ」では不自由がある人でも楽しく、健康に過ごせるような目配り、気配り、心配りがされており、利用者様の笑顔も多かったように思います。今回

はデイサービスでの実習でしたが、私の目指す教師も同じように「人を相手にする仕事」です。生徒や保護者に対して目配り、気配り、心配りができるような先生を目指したいと思います。

留学報告



「あの日の言葉がくれた 魅力的な“世界”」

生物生産学科 家畜生産学講座
家畜育種学研究室
学部4年 有馬 航輝

2017年4月から2018年3月までオーストラリアはクイーンズランド州で過ごした。語学学校でも、大学への留学でもなく、馬術競技馬調教育成牧場への留学だ。この1年は、文部科学省の国家プロジェクト「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」派遣留学生への採択決定という大きな結果からスタートし、自分と戦いに戦った。

大学からはじめて馬術というスポーツ。大学3年生までの3年間でたくさんの方に支えられ、多くのことを勉強させてもらった。いつしか「このままこの世界でやれるとこまでやってみたい」と思うようになった。技術も知識も足りない私は、卒業するまでに本当の現場レベルの馬術を経験したいと思っていた。

留学中は「あのレベルにまで達したい」「これができるようになりたい」「なぜできない」、1年という期限付きのプレッシャーからか、焦りが隠しきれない。でも、自らの騎乗技術向上のためのトレーニングをメインに置き、「必ずどこかで光が見える」「この世界で必要とされる人間になりたい」と、日々意識を高く持ちながら。来る日も来る日も馬に乗り続けた。

日本とは全く異なる AUS の馬文化。競技会に参加すれば、自分よりも綺麗に競技するジュニア選手達。Interschool の競技会で見たジュニア選手達は「あなたたちプロですか？」と言わんばかりの美しい騎乗姿勢と技術を持っていた。広大な敷地で24時間放牧管理される競技馬は獣医師だけでなく、専門的知識を有する多くのサポーターにより、よくコンディショニングされていた。選手層が非常に厚く、年齢も様々な実力者が戦国時代のようにあらゆる競技会で争っていた。彼らの競技馬はよ

(16) あらた同窓会学生向け会報

く調教されていて、私たち研修生の先生としてたくさんのことを教えてくれた。

大学に入学したあの頃、これほど学生のチャレンジを応援してくれるプロジェクトが存在することを知らなかった。そして今、「トビタテ！留学 JAPAN・学生ブランドマネージャー」として話をさせてもらって、同窓会組織「とまりぎ」のコアメンバーとして、近くでトビタテ生を見ていてワクワクが止まらない。このコミュニティは今、国家プロジェクトという枠を超え、学生主体のハイパワー集団として多様に形を変えながら、着実に日本中、世界中に手を広げている。あの日発した「頑張りたい」という小さな決意が、私をこんなにも魅力的な世界に連れてきてくれたのだ。君も一緒に進まないか？



「留学体験記」

生物環境学科 生産環境工学講座
利水工学研究室
学部4年 日吉 恵理

2016年8月から2017年6月まで学術協定校であるスウェーデンの Linköping 大学へ交換留学をし、言語、文化、教養、国際環境問題を主に学びました。9月から1月まで受講した国際環境問題についての授業が一番学びの多い授業でした。受講者数も10人だけ、出身国、年齢も全員異なり、とても多様性のあるクラスでした。はじめ2、3回は講義形式でしたが、それぞれが国代表になりながらのディスカッション、グループワークがほとんどで、まだ英語で自分の考えが思うように伝わらず、また質問や相談がしたくても、語学力に自信が持てず、積極的に参加できない状態で、毎回もどかしい思いをしながら受けた授業でもありました。はじめての英語による授業、海外からの留学生メンバー、授業形式、内容、わからない

ことがほとんどで、挫折が多かった分、精神力、知識力が鍛えられました。

また、1月からはじまった Nordic Culture という授業では、20か国以上の留学生と一緒にスウェーデンの文化や歴史の講義やグループワーク、校外学習を行い、とても濃い国際交流ができました。特に校外学習では約1週間40人以上と同じ時間を過ごし、国ごとの食事やライフスタイルだけでなく、人種や生まれた環境、習慣、文化でこんなにも違いが生まれることにも驚愕を受け、朝起きてから寝るまで一瞬一瞬が新しい発見で、今までやったことのない貴重な体験でした。この授業が始まった頃からコミュニケーションの取り方に自信が持てるようになり、一気に交友関係が広がりました。たくさんの色んな人と、なんでも話すことを意識して、自分たちの勉強の話だけでなく、国際的問題や政治、お互いの趣味、時にはゴシップまでも共有できるようになり、忘れられない有意義な時間になりました。

留学は、勉強だけでなく、自分を見つめ直す良い機会、また、人生の分岐点になり、スウェーデンで世界各国の様々な分野の学生と一緒に学べたことはとても貴重な経験になりました。多くの方に支えていただいたことで、無事留学を終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。世界中どこでも活躍ができるエンジニアになれるよう、日々いろんなことに挑戦していきたいと思います。



ダーラナホース（スウェーデンの伝統工芸品）



「ミャンマーで 国際協力を学んで」

農業生産科学科
学部1年 久富 紫音

私は「国際協力体験講座」に参加し、大学生活初の夏休みを10日間ミャンマーで過ごしました。参加した理由は様々ですが、今思い返せばミャンマーへ行く前はただ国際協力や外国とか、そういうものを見てみたいだけという浅い考えであったように思います。何を学んでこようかなんて、深く考えていませんでした。ですが、帰ってきた時には想像していなかったほどに多くのことを得ていました。単に知識的な事を学んだだけでなく、人間として大きく成長できたとさえ思っています。

研修中は、実際にミャンマーで国際協力に携わっておられる二人の日本人の方にお世話になり、農業や教育に関する興味深いお話を聞かせていただきました。私はそれまで「国際協力」というものは、先進国が発展途上国に対して技術や機械を持って行って、学校なり施設なりを作ってそれで終わりだと思っていました。ですがそれは全く違うものだという事を学びました。

そのことを私に伝えてくださったお二人の国際協力やミャンマーという国に対するアプローチの仕方や想いは大きく違っていました。しかし、根底にある考え方は同じでした。それは国際協力とは“与える”事ではなく、支援先の人々に未来もずっと繋いでいける何かに気付いてもらえるような“足がかり”になるということです。いくら凄い技術や機械を持ち込んでも、支援する人がいなくなった時に自分たちでそれを使えないなら、それはただ支援する側の自己満足に過ぎません。私の考えていた国際協力のイメージが大きく変わりました。

長かった軍事政権に「努力する気持ち」を奪われてしまったミャンマー人に、教育や環境の大切さ、努力しなければ変わらない事に気付いてもらおうと尽力されるお二人の熱意を感じ取り、素晴らしい事はできなくても、自分にできる事をやって、少しでも貢献できればと思います。そして今回学んできたことを大いに残りの大学生活に活かしていきたいです。



国際協力体験講座現地プレゼン



郡元キャンパスのイチヨウ



編 集 後 記

猛暑も一段落しましたが、近年の異常気象が当たり前の気象に変わりつつあるような昨今です。今年は来るのか？と思っていた秋の気配もさすがに濃厚になってきました。経団連が就活ルールの廃止を決め、来年は改元、消費税増税、そしてその先のオリンピック、さらに鹿児島ではオリンピックの直後の国体と大きな行事がこれでもかと目白押しに続きそうです。

大学も大学祭の時期ですが、恒例であったみこしパレードが取りやめとなり、少しさびしい気がしないでもありません。気象だけではなく、世の中も大きく変化していく予感がしますが、学生の皆さんには、このような時こそ、周りに流されずに、しっかり地に足をつけて、自分の考えをきちんと持ち、前に進んでほしいと思います。諸先輩の活動を報告するこの会報が、わずかながらでも、その一助になれば、編集に携わる一人として、うれしい限りです。

(文責 附属農場 遠城道雄)

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24

TEL・FAX 099(285)8537

e-mail(aratakai@mc2.seikyo.ne.jp)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00～16:00)

印刷所	株式会社鹿児島新生社印刷
住所	鹿児島市七ツ島1-1-1
TEL	099-261-0111
FAX	099-261-3100
E-mail	kagoshima@shinsei-p.co.jp



さつまいも植え付け



化学実験



測量実習